

旭労災病院ニュース

病院情報誌 第 45 号 平成 21 年 8 月 1 日発行

発行所：旭労災病院

〒488-8585

尾張国守平字北61番地

TEL 0561-54-3131

FAX 0561-52-2426

<http://www.asahih.rofuku.go.jp/>

子宮頸癌とウィルスそしてワクチン

産婦人科部長 宮田 敬三



子宮頸癌とは、子宮の入り口(頸部)にできる癌のことをいいます。子宮頸部は、感染や性行為や出産などで刺激を受けやすい場所です。刺激により細胞はダメージを受け、一部の細胞は異常な変化をおこし、異形成という病変になります。さらにその一部は、上皮内癌あるいは進行癌へと進んで行きます。

子宮頸癌の発症にヒトパピローマウィルス(HPV)の感染が非常に関係深いことがわかってきました。HPVは現在100種類以上が分類されており、その中でも子宮頸癌に対してのハイリスク型がわかってきました。またそれらをDNA検査することも可能です。発症リスク増加因子としまして、若年初交、多セックスパートナー、多産、喫煙、避妊薬服用などがあります。そして初交の低年齢化に伴い、最近20~30歳代の子宮頸癌による死亡率が急増しています。

わが国の子宮がん健診は、2001年米国より発せられた新しい細胞診分類により変わりつつあります。HPV感染も考慮しながら、経過観察・精密検査の決定や治療の振り分けが、臨床の場で厳密でしかも容易になりました。

HPVワクチンも米英両国で開発され、わが国での臨床使用待ちです。ただ感染前投与が原則で、11~13歳女兒への投与でどのように父兄の理解を得るのか、あるいは3回実施で現在360米ドルほどの費用をだれが負担するのかなど問題も山積です。

最後に、異形成や早期の子宮頸癌はそのほとんどに症状がないため、子宮がん健診で発見されることが多いです。早期子宮癌が発見できれば、ほぼ100%の治癒が期待でき、妊娠や出産にはほとんど影響がないと言われています。今後増加するであろう若年子宮頸癌に対し、20歳台からの子宮がん健診を勧めただけで幸いに存じます。

one airway one disease



呼吸器科部長 加藤 高志

上気道と下気道疾患はともに感染、アレルギー、好酸球炎症の標的臓器であり、相互の関連性が強いことがわかっています。上気道に代表的な疾患としては、アレルギー性鼻炎、好酸球性副鼻腔炎などが、下気道に代表的なものとしては、気管支喘息、気管支拡張症、びまん性汎細気管支炎などが挙げられますが、両者が1つの気道疾患であることを認識して診療を行うことが重要とされています。病態についてはまだ不明な点が多いようですが、それぞれの疾患が直接あるいは間接的に影響を及ぼしあっていることは明らかです。例えば、古くから知られているものとして、慢性副鼻腔炎と下気道疾患として慢性気管支炎、気管支拡張症、びまん性汎細気管支炎とを合併した状態である副鼻腔気管支症候群があります。また、アレルギー性鼻炎の国際的ガイドラインである「Allergic rhinitis and its impact on asthma(ARIA)」によって、アレルギー性鼻炎と気管支喘息の合併について注意が払われるとともに、両者を個々の疾患としてではなく、1つの気道アレルギー疾患としてみることの重要性が指摘されています。これが、「one airway one disease」の概念です。

アレルギー性鼻炎に合併する気管支喘息の頻度は報告によって大きなばらつきがありますが、両者の合併頻度が有意に高いとする報告が圧倒的に多く、その合併頻度は成人よりも小児で高いとされています。一方、喘息症例におけるアレルギー性鼻炎の合併率は、アレルギー性鼻炎症例における喘息の合併率よりも高値であることがわかっています。アレルギー性鼻炎と喘息は発症年齢が異なり、小児では喘息に続いてアレルギー性鼻炎が発症すると考えられています。また、喘息の多くは思春期に寛解しますが、アレルギー性鼻炎は自然治癒することがないため、成人ではアレルギー性鼻炎が喘息に先行して発症する症例が多いようです。喘息に合併するアレルギー性鼻炎は、喘息の症状の増悪因子としても働き、スギ花粉シーズン中のくしゃみや鼻汁の程度と喘息の重症度が有意に相関し、喘息のないスギ花粉患者でも花粉飛散期にピークフローが低下することが知られています。さらに、アレルギー性鼻炎の治療を積極的に行うと、喘息発作が有意に抑制されることが実証されています。

実際の臨床現場では、咳嗽の原因が副鼻腔疾患であったこともよく経験します。いずれにしる、治療に抵抗性を示す気管支喘息や咳嗽症例を診たときには、上気道疾患の合併を否定する必要があります。

